

朝鮮認識における幸徳秋水

石坂浩一

はじめに

- 一、一九〇〇年以前の幸徳秋水
 - 二、一九〇〇年の幸徳の論調
 - 三、萬朝報退社までの幸徳秋水
 - 四、平民社以降の幸徳秋水
- まとめ

はじめに

最近、別稿において私は日本人初期社会主義者の朝鮮認識について検討した⁽¹⁾。そこでは日本人社会主義者の朝鮮認識を考える上での若干の方法論も提起しておいた。それは要約すれば、日本人社会主義者の思想総体を考える中で朝鮮認識を検討すべきであるということである。しかしながら、その別稿においては紙数の不足から、みずからの提起

を充分生かされなかったとはいえない。そこで本稿では、幸徳秋水をとりあげて、その思想と朝鮮認識のあり方を系統的に追究してみたい。

初期社会主義者が社会主義者として活動しえたのは一九〇〇年代の十年足らずの歳月にすぎない。従って、彼らが社会主義者を自称ないし自覚する以前からの思想の変化をおさえることは無駄なことではないだろう。そのことは同時に、社会主義者と非社会主義者のちがいを浮きぼりにすることにもつながると考える。

一、一九〇〇年以前の幸徳秋水

一九〇〇年前後する幸徳の『萬朝報』時代は、彼が社会主義を徹底させ、みずからの政治的野心を克服する中で、次第にブルジョア的価値観から分離していくプロセスであ

った。

まず、社会主義者を自称していない、一九〇〇年以前の幸徳を考えてみよう。しばしば論じられるのは中国問題である。たとえば、欧州各国の中国に対する租借地要求の相次ぐ中で英国では清国独立維持の決議案が出たが、これは「唯だ一場のお茶番のみ、唯だ清国若くは日本の浅薄なる政治家を喜ばしむるお茶番に過ぎずして、彼等露英は暗に顔見合せて舌を吐けるや明らか」だとし、「嗚呼清国の前途は一問題の起る毎に歩一歩暗黒に向って進みつゝある也」と記した⁽²⁾。これと、同年に書いた「日本の外交」をあわせて考えるといいだろう。幸徳は「予は日本に外交あることを信ずる能はず（中略）果して外交なる者ありとせば、日本の外交は一に欧州人を利せんが為の外交なるに似たり、東洋平和を攪乱するが為の外交なるに似たり、我親朋を窮危せしめ死地に就かしめ、己れ亦自ら坐して困竭に陥るが為の外交なるに似たり」という⁽³⁾。そして、こうした外交の失敗のために朝鮮をロシアの勢力圏にされてしまったなどと批判している。

幸徳の立場は、日本の国権ないし權益を対外的に拡大しなければならぬ、というものである。その視点からすると、当時の東北アジアでの列強の帝国主義的角逐は大いに危機感を持つべき状況であるのに、日本の外交は列強に従

属的で權益拡大にはなほだ遠いものだということが論じられている。それは、一方では「夫れ外交の眼中には唯だ利害あるべし、感情あることを容るさず」という徹底した主張となり、他方、イギリスともロシアとも提携することを拒む反西歐的な態度として表出していく。たとえば「我日本は露独と言はず英仏と言はず列国が東洋権力の平衡を破りて、其平和を害するの行動に反対する事」を決議すべきだというように。

では朝鮮についてはどうだろうか。同じ頃に書かれた「日露議定書を読む」は、「朝鮮の前途は猶ほ遠遠也、之を誘掖扶導して完全なる自主独立の域に達せしむるは、是れ日本の曾て自ら其任となす所にして、抑も又た日清戦争の大目的」であるのに、日露新協商は全面的にロシアに有利なもので「朝鮮に於ける日本の勢力が政治的に全く掃蕩されたるもの」だと、日本政府を強く非難した。

幸徳は日本が朝鮮に対する指導者として、朝鮮をみずからの影響力の下におかなければならないと考えていたことがわかる。また別な文章では、朝鮮の独立協会の運動について触れ「彼等が一国世論の偏向する所に従ひ毅然として能く其独立の面目を全うせるの決答こそ、正に是所謂民と俱に之を守る底の真義に触着し得たる者」という。これは字面だけ見れば民権運動としての独立協会を評価している

わけだが、独立協会の運動が主にロシアの勢力伸長に対する抵抗の方向で行なわれていたことから幸徳の肯定的評価が生まれたと思われる。いわば、幸徳の朝鮮認識は、日本の指導力と權益の伸長という問題に律せられていて、帝国主義的な言辞を弄するものでしかない。

二、一九〇〇年の幸徳の論調

一九〇〇年に入ると幸徳は義和団の蜂起以降の一連の状況をめぐっての論稿を多数書いている。朝鮮に直接言及するものは多くはないが、中国論の検討は朝鮮認識と多くの関連を持っているものと考えられるので、詳しく検討してみたい。

ところで、幸徳の義和団をめぐる論説については、井口和起のすぐれたまとめがある⁽⁴⁾。井口は幸徳の論説を列挙した上で、一九〇〇年一〇月までの論説と、十一月以降の「排帝国主義論」や「何の名誉ぞ」などのあいだに「かなりの距離」を認めつつ、それをつなぐものとしては「いわゆる人道主義、理想主義」をあげた。これに対し大原慧は、そうした「距離」を埋める連続性として、幸徳が常に「国民の利益」に基いて議論を展開してきたこと、あるいは「東洋の平和を担保するのは日本の使命である、という

自負をいだいていた」ことなどをあげて「のちに確固たる非戦論へと継承されてゆく琴線となつた」とする⁽⁵⁾。

ここでは井口、大原の両者を批判的に考えつつ、幸徳の一九〇〇年中の論稿について折出される五つの特徴をあげてみよう。

その第一は、何よりも帝国主義相互間の矛盾と葛藤への鋭い省察である。幸徳は「列国協同」において、義和団を鎮圧すること自体は必ずしもむずかしいことではないが、「列国の協同は、唯だ列国が其利害を均くする場合に限る者にして、而して更に表面利害を一にするも裡面に利害を異にすることあり」、義和団鎮圧では協同できても「其裡面には更に幾道の危険なる暗潮を包蔵せずんばならず」と記した⁽⁶⁾。

同様に幸徳は、英露の対立のみに目を奪われて、各国が自己の利益に従いプラグマティックに動くことを忘れてはならないと説く。英露は利害を異にするとはいえ、みずから戦端を開くような賭はしないだろうし、一方で英国はロシアの動きに応じて日本を利用してはいるから、日英の同盟でロシアを制圧しようなどというのは「迂愚の最も甚しき者」だというのが幸徳の主張である⁽⁷⁾。

第二に幸徳が列強に対する警戒と不信で一貫しているということがあげられよう。これは第一の特徴からおのずと導か

れる。ただし、井口も別の論稿について指摘しているように、⁽¹²⁾帝國主義諸国間の矛盾を的確に看取すること、そこで幸徳が提示した日本のとるべき道の正しさとは、まったく別問題であることについては留意しておかねばならない。さて、幸徳の論説「対清運動」をみよう。平和回復の後にくるのは清国をめぐる「処分」の問題であり、そこでは「元より当局外交の手腕如何に存すと雖も、其背後の実力と、今日平和恢復の際に占取せる地歩の如何が、非常の關係を有せずんばならず」と思われるゆえ、「兼て自国の地歩を確保するに於て、決して一步を後るゝを許さず」という主張である。また、列国が「協同」するのは、その「裡面」に各々の思惑があるからである、⁽¹³⁾連合軍の進攻が思うにまかせぬ中でも列国はそれぞれ将来の地歩を固めるのに腐心しているのだから、日本としては単独で北京に突入するか、列強との共同歩調に終始するのかが問われている、⁽¹⁴⁾という主張も見うけられる。幸徳が日本政府に非常に強硬な政策を促していることがわかるだろう。

さらに、伊藤博文ら日本の当局者は国内には専制をふるっても、「白人排斥を企つるが如き、イクヂある者に非ざる」ものだし、清国での反乱も「白人の暴横に堪る能はざれば」⁽¹⁵⁾のことであり、東洋の文明のために真に憂うべきは白人同盟の存在にはかならないという趣旨をも展開している。

和の担保者を以て任ずる我帝国の使命たる」ものだとするのであった。

さらに第四に、日本が朝鮮をみずからの勢力圏内に確保しなければならぬという主張が指摘できる。幸徳は「露国が朝鮮の一港だも得ることあらん乎、是れ我日本の為めに、否東洋全体の平和の為に一大毒針を刺さるゝが如し（中略）露国にして強て之を主張し実行せんと欲せば、即ち東洋新興の強国と宣しく一大決戦を試むるの覚悟なかる可らざる也」という。ロシアとの戦争も辞さないわけだ。そして「彼れ真に北清一帯を領して其経営を完成せんと欲せば、即ち朝鮮を以て日本の手に委して其好意を求めざる可らず」とするのである。

また、別の論稿でも「若し朝鮮一杯の土壤たりとも、他列国の手に委するが如くんば、是れ実に将来帝国の危険にして而して東洋平和の危険也、我日本は今後の危機に際しては、仮令朝鮮政府の希望之れなしとするも、猛然自ら進んで彼を援助し、平和保持の事に任ぜざる可らず」としつつ、当局に「機敏聡明なる行動」を求めた（傍点石坂）。

幸徳は一応は「東洋の平和」のような大義名分を掲げてはいるものの、実際は朝鮮政府の意向にかかわりなく朝鮮を日本の勢力圏にしなければならぬと力説しているのである。

⁽¹⁶⁾しかし、日本の清国における権益拡大は、列強に対する反感と矛盾なく幸徳の思想の中に存在していることに注意すべきだろう。

第三に、日本が独自の地歩を固めるためにリーダーシップをとって東洋平和の担保者となるべきだ、という指導者意識が指摘しうる。

幸徳は論説「日本の態度方針」で、日本のとるべき対中国政策として①清国の利益を列強に率先して擁護する②中国における列強の勢力均衡を維持する③以上の目的のため清国政府を指導しつつ、列国とのあいだの調停者としての地位を固める④そのためには他国との戦争も辞さない、の四項目をあげた。⁽¹⁷⁾だが、幸徳が一方で「能く分割に処するの準備あつて始めて保全を言ふべき」⁽¹⁸⁾であり、清国における反乱は「乱暴狼籍無法大胆」⁽¹⁹⁾のはなはだしいもので、平和回復は列強によってなされるしかない、とする時、彼の立論の根拠があくまで日本の利権確保であり、中国民族の主体性はまったくかえりみられていないことも明らかになる。

このことは朝鮮に対してはもっと明確である。幸徳は「我日本が朝鮮の独立を扶植し平和を保持するに力むるは、二十七八年以來の国是とする所にして、而して是れが我国家存立の爲めに必要な条件たる也、而して更に是れ東洋平

すると、幸徳が「排帝國主義論」や「何の名譽ぞ」などで行なつた「帝國主義」批判の内実は何か、という問題にわれわれはたどりつくであろう。そこで、この「帝國主義」批判の系統の文章を検討してみよう。

まず、一九〇〇年八月七日の『萬朝報』に「非戦争主義」が書かれている。これは、世の平和論者や非戦争論者がなぜ今こそ、その主張を叫ばないのか、という趣旨であり、戦争の悲惨さは説かれているが、自己の主張をはっきり打ち出すような形では書かれていない。しかるに、日本は単独でも北京に進撃するか、列強との共同歩調に甘んじるか、二つに一つであるという前述の「連合軍の方針」が掲載されたのは、この後の八月九日のことである。近接した二つの論説は、あまり一貫性があるとはいえない。

次に、九月二七日には「断じて名譽に非ず」が掲載される。これは「戦ひに長ずるは名譽也、戦ひを好むは断じて名譽にあらず」としつつ、「甲午の戦争は東洋永遠の平和の爲めと称す、拳匪の乱に於ける出師は、所謂人道の爲めと称す、如此くなれば吾人は我出師の名譽なりしを首肯することを得」⁽²⁰⁾るが、少数の者の虚栄や野心のために國民を苦しめるのは名譽ではないと主張した。

そして、十一月一七日には「排帝國主義論」が登場した。幸徳は、欧米の帝國主義は「國民的帝國主義」と称しては

いるが、実際は「唯だ資本家的、富豪的帝国主義」にほかならない、一方の日本は「資本家的帝国主義」でさえなく、単なる「軍人的帝国主義」ないし「空威張的鉛細工的帝国主義」にすぎない、と評し、「国家前途の爲め寒心の極に非ずや」と結んだ。⁽²⁴⁾

井口はこの「排帝国主義論」について、それ以前の中国に関する論説などと比較して「かなりの距離」を認める。幸徳は「領土拡張の主義」として帝国主義を規定するが、その「領土拡張」には何ら必然的な根拠がないことを主張する、市場の開拓・獲得のために海外に勢力を拡張する必要があるという議論に対しては、国内に貧しい持たざる国民をとり残しているのだから、領土拡張以外にとるべき道があると幸徳はいう。従って、幸徳の侵略的な論調がかけをひそめたことが「かなりの距離」として読みとれるが、資本主義批判の点では中途半端で、よって立つ所も「正義」や「公道」といったものであるため、幸徳の主張は軍国主義批判に力点がおかれている。以上が井口の評価であろう。井口は幸徳の軍国主義批判を「人道主義、理想主義」ととらえているが、これは非常にあいまいな評価である。つまり「かなりの距離」の説明としては説得力がない。さらに、井口はレーニンの『帝国主義』を帝国主義理解のひな型として、幸徳の帝国主義論を論じるところをとっている

に進むの必要を認めて之を黙認せる以上は、我日本が兵を厦門に出すの更に緊切なる必要に應ずるを認むるならん、然り英国の領事は決して我兵士の上陸を阻まざることを信ず⁽²⁵⁾と記したのであった。しかし、幸徳の判断は甘かった。すでに検討したように、幸徳は「保全」という名の裏側での各国の思惑を警戒し、日本自身の權益を確保すべきことを訴えており、このアモイ出兵はいわば幸徳の持論の実現とさえいえるものであった。それまで政府の消極策に不平を鳴らしてきただけに、その期待もひとしおであったろう。

しかしながら出兵は失敗した。幸徳にとっては苦汁を飲まされた思いだったにちがいない。かくして、義和団の蜂起以降、六月に四編、七月に四編、八月には一一編もの関連する論説を書いた幸徳が、九月には四編、一〇月にはついに一編も書いていないというありさまになってしまふ。⁽²⁷⁾

この時期、アモイ出兵の挫折以外に、幸徳の論調を変えうる事件は見い出せない。強硬論を説いた前日の八月三日には有名な「自由党を祭る文」が『萬朝報』に掲載されたが、自由党の変節は幸徳の中国論に変化を与えるものとは考えられない。むしろ、伊藤博文の軍門に下った自由党への反発から、対外強硬論の持続により独自性を誇示しようとしたとさえ考えうる。

が、もっと当時の状況に即して「距離」を考える必要はないだろうか。

ここで先に結論を記せば、一九〇〇年八月に起こったアモイ出兵の失敗という事件が、幸徳に大きな影響を与えその論調の転換を生んだことである。

八月二二日、参謀総長大山巖は、機会があればアモイ占領を実行せよという旨の、台湾総督児玉源太郎あて訓令への裁可を得た。そして、八月二四日、アモイの東本願寺布教所が消失したことを口実に、早速、軍艦和泉の陸戦隊が上陸、二七日には台湾からも歩兵二中隊がアモイに向けて出發した。ところが、日本は早々に米英仏三国の領事から抗議を受け、二八日には派兵の中止を命令せざるをえなくなったのである。

では、幸徳はこの事件をどう見ていただろうか。八月三一日に掲載された論説を検討してみよう。この文章は派兵中止を知らずに書かれたものである。幸徳は「嗚呼清国人民の頑冥一に此に至れる哉」と書き出し、「暴徒」が本願寺を焼き日本人を排斥せんとしている状況下でアモイ道台はこれを鎮定もせずに逃亡してしまったのだから「我は我利益を保護せざる可らず、我權利を主張せざる可らず」として、出兵の必要を説く。そして、ここが重要なのだが、「各国亦既に露兵の北清に入り、英兵の上海及び長江沿岸

アモイ出兵の失敗を知った幸徳は、九月の中下旬にかけて「清国保全の意義」「保全論と人種の区別」「罪、白人同盟に在り」を次々と書いた。列強に対する反感と警戒は以前になく露骨で、白人という表現でこれだけ論じられていたのも、この時期だけである。なおかつ幸徳は、アモイ出兵の失敗について、ひとことも論じていない。従来、幸徳であれば、出兵の撤回に対しては必ず批判したのである。幸徳自身も出兵に賛同していたのだから。ところが、この三つの論稿には列強批判・白人批判はあっても政府批判はない。列強のいう「保全論」についてはやはり警戒的だが、近衛篤磨らの国民同盟会結成についてはそれを「喜ぶ」としつつも「彼等は果して列国の向背、時局の変移如何に拘はらず、尺寸の地をも割譲若くは租借を許さずとするか」と慎重である。幸徳の反発と挫折感を読みとることができはずだ。⁽²⁸⁾

だが、注目すべきことに、幸徳は日本の進むべき道について新たな模索を開始しようすもうかがえる。それが九月二七日の「断じて名譽に非ず」という論説にほかならない。この論説の最初の段落で「戦ひに長ずると戦ひを好むとは全然別事」であり、「戦ひに長ずるは名譽」だが「戦ひを好むは断じて名譽にあらず」としたことには意味深いものがある。これは、感情的なまでに好戦的だった幸徳

自身への反省と考えることができるからだ。ただし、国民が戦争から受ける悲惨に言及しているとはいえ、戦争を決定的に否定したわけではない。

さらに「断じて名譽に非ず」から五〇日間の時間を置いて「排帝国主義論」が書かれる。ここで、その論理展開を検討してみよう。

幸徳が「帝国主義」を「領土拡張」としてとらえているのは、井口の指摘するとおりである。幸徳は欧米の帝国主義を否定するが、それは欧米の帝国主義が「資本家的、富豪的帝国主義」にすぎず、時にそれは「国民的帝国主義」と称されるものの単なる「一時の口実」であり「多数国民の利益に非ざる」ものだからだという。同時に、日本の「帝国主義」については「軍人的帝国主義」や「空威張的、餉細工的帝国主義」と否定している。そして、戦争の遂行と同時に経済的膨張をとげている欧米に比べ、とるに足らぬ経済力の日本が「国民的帝国主義」をいうのは「噴飯に堪ざる」もので、「外交は無能、其財政は困迫」と現状を批判している。

幸徳は、いわゆる「国民的帝国主義」まで含めて帝国主義を否定しているが、列強と日本についてはそれぞれ異なる規定をした。そのことは、欧米列強がこれ以上勢力を拡大すれば日本にとっての一層の脅威であるということと、

この時期の幸徳の論調の第五の特徴としてあげたい。

この節の終わりに井口和起と大原慧の研究について若干コメントしておく。

井口は、幸徳に即した分析としつつ、やはりレーニンの帝国主義論の尺度にとらわれているのではなからうか。井口は、資本主義批判の論理の「芽生え」はあるが結局軍国主義批判でとどまってしまった、と幸徳を評している。しかし、幸徳にとっての「排帝国主義論」は、帝国主義一般ではなく、とりわけ日本に対する批判が意図されており、列強の帝国主義批判は一つの事件ともいえるものだったと思われる。なぜなら、アモイ事件以降、列強に対する批判は継続して行なわれているのに対し、日本政府に対する批判は、外交面ではなりをひそめており、この論説は、事件以降初めて新たな明確なる批判として登場しているからである。いわば幸徳は一人の政論家として、アモイ事件以前のみずからの主張を総括し、新たな政府批判の論理をもって再登場したわけだ。

また、大原の場合、その評価は若干高すぎる。まず、幸徳は「国民の利益」に基いて自説を展開したのであり、国権論的主張と受けとれるものも、決して政治家や資本家の利益を主張したのではないと大原は指摘している。だが、ここには二つの意味で問題がある。一つは、幸徳が「国民

日本はアモイ出兵のように国家的実力を度外視した冒険を行なってはならないという二つのことを意味する。これは一面で軍国主義者幸徳の戦術転換にすぎないともいえるが、他面、その後の幸徳の発展の一つのステップにもなっている。そして、「多数国民の利益」が新たな名分となった。

以上を評価すれば、幸徳がアモイ出兵の挫折をみずからの教訓として、日本の進むべき方向について従来の持論に反省を加え、一九〇〇年一月の時点に至って(戦術的にはあれ)帝国主義否定に到達したといえよう。だが留意すべきことは、幸徳のいう「多数国民の利益」というものの実体がこの時点では不明確なことである。前述したような戦争の悲惨さを批判するという点では「多数国民の利益」はほぼ文字通りのものとなるが、時として国家の利益が「多数国民の利益」にすりかえられる危険が存在しやう。

また、いまだにあいまいとはいえ「自由平等」の理念についての再認識も指摘できよう。幸徳は「所謂文明を以て誇るの徒輩」が貴族や財閥を崇拜していることを「文明を汚辱する者」と批判し「自由平等」の真価を復権しようとしている。こうした側面は、一九〇〇年の社会民主党創立へとつながっていった。このように侵略的外交論からの転換の第一歩が一九〇〇年において行われたということと、

の利益」を意識したとすれば、それは一九〇〇年一月の「排帝国主義論」以降であり、それ以前は論説を注意深く検討しても「国民の利益」という言葉自体がほとんど見当たらないということ。一月の論説における「国民の利益」の主張は、既述のようにアモイ出兵の挫折をなめた幸徳にとっての新機軸ともいえるもので、それを六、七月にさかのぼらせることはできないのである。もう一つは、アモイ出兵以前に幸徳がしばしば主張したのは「国家の利益」であり、直接には資本家の利益を説いていないとしても、事實上、資本家などの利益といつでも一体化しうるところに論拠を置いていたということである。むしろ幸徳は、政府以上に侵略的でさえあったではないか。

また大原は、幸徳が東洋の平和を担保することを日本の使命と位置づけたのは、後進諸国の利益擁護のためである、幸徳は他国への侵略を説いたことは一度もないとさえい(28)きる。だが、朝鮮政府の意志にかかわらず、朝鮮が危機に陥れば、日本は介入すべきだということを幸徳は堂々と説いたはずだ。日本の利益主張を正当化するための幸徳のトリックを大原がそのまま受け入れて真意を誤読したか、あるいは何らかの先入観や思い入れに左右されたのか。大原の論旨は事実には忠実でない。

幸徳は非常に政治的野心が大きく、政界進出も狙って

たことは従来の研究でも指摘されてきた。そのことは、彼を一人の民衆として思考させるより、一人の政論家として思考させることになつたにちがいない。この政論家としての性格が、幸徳に権力と同化した立場での朝鮮中国侵略論を主張させる一因となつたと思われる。こうした問題点は次第に克服されていくものの、これ以降も彼の論調に残存するであろう。

三、萬朝報退社までの幸徳秋水

一九〇一年、幸徳秋水はすでに発表したことのある文章に若干の手を加えて『廿世紀之怪物帝國主義』を上梓した。秋水のこの著は「帝國主義は所謂愛國心を経となし、所謂軍國主義を緯となして、以て織り成せるの政策」であるとして批判の矢を放つた、世界的にも先駆的な著作である。彼はまず、愛國心を否定した上で、軍備拡張は愛國心におられた「狂熱」以外に何の理由もなく、軍國主義と戦争こそが社会の進歩を妨げているのだと論じた。さらに、「帝國主義」とは版図の大拡張を意味するが、こうした膨張は少数政治家と軍人の功名心によるものすぎず「国民の膨張」とはいえないとしつつ、イギリスが貿易によって繁栄しているように貿易の利益の一致により永久無限の繁

栄をはかるべきだと提案する。

この本は、貧民の増加は単なる人口増加によるのではなく、経済組織・社会組織に問題があることによるのだとするなどのすぐれた観察を含んでいるものの、論理的にはいくつかの矛盾が生じていよう。たとえば、貿易の利益による繁栄を理想として提案しているが、では例にあげたイギリスは武力侵略と縁がないのかどうか、あるいは現代においてどの国に帝國主義が存在するのか。むしろ幸徳は貿易による利益の拡張という戦略を正当化するために、イギリスを強いてその型にあてはめようとしたかのごとく感じられる。また、貿易の活発化はアプリアリに国民の幸福に結びつけられているが、このことは本書で論証されてはいないことがらにはかならない。

さらに、本書には、日本に関する具体的な問題はほとんど登場せず、朝鮮についても何ら分析はない。ただ、日本人が清國人を憎悪し侮蔑することのはなはだしきは「狂」というべきほどだと、ひとこと触れたにとどまった。本書は基本的に、アモイ出兵の挫折をふまえて、貿易による利益の拡大という日本のめざすべき道を提案するためのものといえよう。前年来の幸徳の議論の推移からすれば、本書における愛國心批判は、かつての幸徳自身のような乱暴な対外強硬論への批判であり、軍國主義批判は藩閥政府批判で

あると考えることができる。こうしたことからしても、幸徳はみずからの日本における批判意識を、世界の帝國主義の分析に演繹して適用していき、この著を作り上げたといえよう。

幸徳はこの一九〇一年に「社会主義の大勢」という論説で、帝國主義は多数人民を飢餓と罪惡におとし入れ貧富の差を拡大させるので、そうした貧富の差を除去するために社会主義をとる必要があると説いた。彼が「我は社会主義者也」を書いて社会主義者としての公然たる宣言を行なったのもこの年である。かつての好戦的で軍國主義的な態度を総括した彼は、国民の利益のための政治をめざし始め、そこに社会主義という方向付けが現われてきたのであった。

しかしながら、一人の人間の思想が一朝にして全く転換してしまふというわけにはいかない。一九〇一年には朝鮮について正面から論じた文章は見当たらないが、伊藤博文を批判する論説においては「朝鮮に於ける我權利利益を喪失せるも（中略）彼が優柔不断の結果に非ざるはなき也」⁽³⁴⁾としていっている。朝鮮を日本の勢力圏内におくべきだとする点⁽³⁵⁾は、幸徳の依然として変わらぬ主張であった。また、東洋の大局の利益と平和を増進する責任は日本にあると任じていた幸徳の指導者意識も、以前と同様である。

このほかに、ロシアの動きなどを述べた文章で、外敵は

武力で退けることもできるが内治の腐敗はいかんともしがたく「今の朝鮮支那の如きに至らんか」と表現したり、山県と伊藤の政争の醜さは「朝鮮人の政争にあらずや」とたとえてみたりするなど、朝鮮に対する蔑視も明らかに示されている。

さて、一九〇二年に日英同盟が結ばれ同年中にロシアが第一次撤兵を実行すると、日本の対露論調も若干の鎮静をみたが、一九〇三年の春頃から再び日本の開戦論が台頭した。こうした情勢の中で幸徳はどんなことを論じているだろうか。

まず注目したいのは、一九〇三年五月に書かれた「日本の東洋政策」という論説である。これは「某外人」の手紙の一節を紹介するという形式をとっているが、幸徳自身の手で作られたものである可能性も残されている。少なくとも「某外人」の意見は、この時期の幸徳の意見と一致するものであった。

この「某外人」は、日本ではロシア討つべしの声が高いが、ロシアの「満洲」経営の結果、日本がどれだけ利益を侵害されたというのか、と問う。そして、日本は台湾朝鮮経営でどれだけかの進歩をみることができたのか、と問い返す。実際、今の日本は「利益の侵害さるゝを恐るゝよりは、先づ侵害さるゝ丈の利益線を拡張し」なければなら

ないではないか。結局、この「某外人」は、「日本今日の急は朝鮮の経営に在り、朝鮮の経営は露人の之を脅かすを憂ふるよりも、自己の経営の力の足らざるを憂へよ、自己の画策の周ねからざるを憂へよ。朝鮮の運命の危険なるを憂ふるよりも、日本人の此地に於ける立場の鞏固ならざるを憂へよ」というのであった。⁽³⁸⁾

幸徳はアモイ出兵の失敗の苦い教訓からしても、ロシアと戦争をして勝つ見込みがあるかどうか、大いに不安を持ったことだろう。そこで、ロシアとの戦争を回避し、なおかつ日本の権益を朝鮮において拡大していくために、朝鮮への経済侵略の推進を構想したにちがいない。この文中には「人口過剰に苦しめるの日本は、彼の茫漠たる朝鮮の沃野を以て、何ぞ直に日本農民の鋤型の下に置かざるや、若し多数の人口にして朝鮮の地に住し、其富源は、其農工は、全く日本人の手に落つるに至らば、是れ朝鮮を以て事実上日本のプロテクトレートと為す者に非ずや」とも記されている。この「某外人」ないし幸徳は「茫漠たる朝鮮の沃野」にも数多くの農民がいて、日本人のこうした動きが侵略にほかならないことを気づかなかつたわけだ。

幸徳はこの論説とほぼ同様の趣旨を八月に「非戦論」で述べている。彼は、三国干渉を口にして悲憤慷慨する人々を「復讐主義」だとして否定し、「満韓経営」が固まらぬ

ば何回ロシアと戦争をしても徒勞に終わるだろうと説く。そして「我國民の朝鮮に於ける経営の基礎が今に於て確立しないのは、露人の妨害の爲めでも何でもなく、日本の貧乏なるが爲めである、イクダのないが爲めである」として、もし日本が鉄道を敷設し多数の移民を送って富を開発して朝鮮における基盤を固めておいたならば、「満洲」における位置は日本が主でロシアが従となつていただろうと主張する。ところが、ロシアと戦端を開くならば五億、六億という大金を要するが、それだけの大金を費消するならば、なぜ生産的に経済的膨張の費用としてそれを使用しないのか。この上、戦費を費すならば、日本國民を餓死させてしまうではないか、というのが幸徳の言いつ分であった。⁽³⁹⁾

こうした幸徳の論調の背景にも、やはり戦争が成功するかどうかおぼつかないという、大局的立場からの不安が存在している。日本が後発の帝國主義國として、軍事に偏重していることを幸徳はよく自覚している。ここでもやはり、朝鮮に対する侵略推進という考え方は従来と変わらぬが、一方では政府と異なる戦略を提起している点に、その後の幸徳とも関連して注意しておくべきであろう。時間的に前後するが、七月に発表した「非開戦論」は、もっと「人民」の立場を前面に押し出している。六月一日に行なわれた社会主義協會での演説会の演説筆記である

この文章で、幸徳はまず日清戦争は「朝鮮の独立を扶け、支那の暴を懲らす」という「理屈の上からいへば斯る立派な戦争であった」が、多くの人々が犠牲となり「日本の國家は重大なる損害を蒙った」という。そして、戦後経営において「疲れ切った日本人民から此の莫大なる金が絞り出され」たことからしても、今、日本のなすべきはロシアと戦うことではなく、「實際的に経済的に満洲に出て行くより外はない」し「國家百年の計は経済上の膨張を期し、國民を富ますこと」でなければならぬと説く。かくして、ロシアを討つなどというのは「無謀な事」であつて、日本人全体を憂い國家を憂う立場からも「多数の人民の生命を傷け財産を奪ふ所の戦争には反対する」と宣言したのである。⁽⁴⁰⁾

ここでは戦争で得をするのが少数の御用商人らにすぎず、大部分の國民は犠牲となるだけだという主張がかなり詳細に、それも日清戦後経営期まで射程に入れて語られている。それまでの幸徳は、國家の利益を議論の中心にすえ、その枠内で國民の生活の問題を論じていたが、この時期に至つてようやく戦争反対の理由の重点を人民の悲惨と犠牲というところに本格的に置き始めたと思われる。社会主義を身につけ國民の人権への考察を深めてきた幸徳も、ことが対外問題になると國家の利益への配慮が先行し、理念と現実

を見る目とがうまく結合しなかったが、一九〇三年半ばの段階になって内政から外交までの全面における、ブルジョアの価値からの分離が始まったのであった。

しかしながら、この論説においても日清戦争の戦場とされた朝鮮の民衆に対しては、何ら思いがいたっていない。また、商業紙『萬朝報』の花形記者として、政論家としての論陣を張る幸徳は、戦争に対する対案として、朝鮮への経済侵略を語らずにはいられなかったのだから。八月に『萬朝報』に発表した「拋棄併呑乎」は、彼が従来から引きずってきた侵略的思考方式をあらわにしている。

幸徳はいう。「独立扶植」というのは結構な言葉のように聞こえるが、この一〇年間の歲月はその言葉が空辭であることを証明した。今や「独立扶植」ではなく朝鮮を日本としていかにするかが問題なのだ。ところで、その朝鮮問題を解決するための基準は「朝鮮人民の爲の利権」、そして「東洋人類、世界人類の文明」のために有益かどうかであり、「拋棄、若し人類を利せば拋棄せよ、併呑、若し人類を利せば併呑せよ」というわかれ目に来ているのである。それは、朝鮮が憲法政治に浴し富源が開発されて民生が向上するか、朝鮮が長く「蛮野の奴隸」となつて荒地の野に放置されるかという問題であり、この問題は「日本國民の肩」にあつて解答を迫られている。そもそも、なぜ朝鮮

に限って独立にのみこだわらねばならないことがある。独立を「扶植」できなければ、それはやむをえないのではないか。今こそ「民生の利福の爲めに、文明の進歩の爲めに、一大果決を要するの時」にほかならない。⁽⁴⁵⁾以上がこの論説の趣旨であった。

幸徳は一応、併呑か放棄かという二つの選択肢を読者の前に投げ出している。しかし、彼が「民生の利福」や「文明の進歩」のための決断を迫っていることからすれば、彼が人類の幸福のためと称して朝鮮の併呑を主張しようとしているのは明らかである。

幸徳は朝鮮人自身の発展の力量というものを全然認めていない。朝鮮の土地に耕作し生活する農民の姿は欠落し、朝鮮は単に取るべき土地空間でしかなくなっている。彼は戦争の問題については、アモイ出兵の失敗以来、その考察を深め権力層との分岐を次第に形成してきたが、朝鮮についてはまったくそうした認識の深まりはない。そこには、朝鮮に対する無知と、以前からアジアの他国に対して抱いていた指導者意識が支配していた。これが平民社以前の時期の彼の到達点にはほかならなかった。

可し、然れども吾人平民は是等の地より何物をも得可らざるを如何せんや」と述べている。ここに至って、平民の利益と権力層の利益は、論理的には明確に弁別された。朝鮮を経済的な側面から日本の勢力圏に取り込もうというような対案の発想もない。

一九〇三年の「非戦論」の段階での幸徳は、日本の国家的侵略の方法については是非を問うていたのだが、平民社をおこして以降、特に一九〇四年に入ってから論稿は、侵略の方法ではなく侵略それ自体を否定して、日本の権力との対決の度合を深めていく。その思想の一貫性が形成されていくわけだ。

一九〇四年夏の「社会党の戦争観」をみて、戦争の目的とは植民地と新市場の獲得にほかならず「日本が朝鮮、満洲、西比利を取れりと仮定せよ、之が福利を受くる者は、唯だ政治家、資本家の階級ならんのみ、何の地位もなく些の資本なき多数労働者は、能く何事を為し得べき乎」と主張している。⁽⁴⁶⁾

なお、『平民新聞』第三六号の「朝鮮併呑論を評す」は、幸徳のものであるかどうか疑問があるので、ここでは取り上げない。ただ、次の第三七号で、この「朝鮮併呑論を評す」を揶揄した『萬朝報』の記事に反論する「萬朝記者に答ふ」が掲載されたが、これは幸徳の署名がある。しかし、

四、平民社以降の幸徳秋水

一九〇三年一〇月、幸徳秋水と堺利彦は萬朝報社を退社し翌月に平民社から『平民新聞』を創刊した。このことは、幸徳が体制内の野心から決定的に訣別し、ブルジョア的な価値と全面的に対決せざるをえなくなる重要な分岐点であった。

では、幸徳はそこで朝鮮についてどのような議論を展開したのだろうか。結論からいってしまえば、幸徳が朝鮮の問題を正面から取り上げた論稿というのは、平民社以降一つもないのである。⁽⁴⁷⁾それでも、断片的なものはいくつかあるので検討してみよう。

幸徳は『平民新聞』第一号に「真に已む可らざる乎」を書いた。ここでは「露國、朝鮮を取ると云ふ乎、取らざるの朝鮮、平然として知る所あらず、日本独り騒がざる可らざる乎」としている。⁽⁴⁸⁾日本でロシアの脅威を騒ぎ立て冷静な判断を失ってしまった人々に対し、国際情勢を落着いて考えるべきことを促した文章といえよう。

また「戦争の結果」という論説では、戦争によって増税・物価騰貴・賃金下落などがもたらされることを主張し「嗚呼、満洲も取る可し、朝鮮も取る可し、西比利も取る

この文章は、一年前に幸徳が書いた「拋棄併呑乎」と『平民新聞』の論調が矛盾していないと主張しているものの、弁解じみでいて説得力がない。むしろ、幸徳の思想が一年のあいだに前進したというのが事実であろう。

このあと、入獄や渡米を経る幸徳は、いよいよ朝鮮に触れることが少ない。ようやく言及するのは一九〇七年以降である。

幸徳は『牟婁新報』に掲載された「文明の徳沢」で、西欧近代文明よりもアフリカ文明のほうに「光榮」を見い出すとしたのち「知らず、吾人日本人の浴せる文明、台湾人をして浴せしめたる文明、朝鮮人をして浴せしめんとする文明は、果して如何の文明ぞや」と問いかけた。⁽⁴⁹⁾

また、同年の『社会新聞』にのった「道徳論」では「我が日本人はチヨクチイ人に比すれば善を行ふの範圍広かるべし、されども尚ほ日本人に為して悪しきことも朝鮮人に為しても構はぬこととなり居れるが如し」と述べた。⁽⁵⁰⁾

同年秋の『大阪平民新聞』の評論では、幸徳は、朝鮮侵略に反対する日本社会主義者の決議が欧米の社会主義者に注目されていると記し、第二インターの大会における移民問題をめぐる討論の結果を早く知りたいものだと書いている。⁽⁵¹⁾

翌年の年頭には『高知新聞』に寄せた「病間放語」にお

いて、社会主義が日本を含む世界中で勢力を拡大しているのだと説いた。特に中国については「世界の革命史上に於る第二の露国」とし、「比律賓人、安南人、朝鮮人中、亦気概あり学識ある革命家、決して尠きに非ず」と訴え、日本に革命のきざしが無いというのも大きな誤りだとしてい(49)る。

以上が、平民社以降、幸徳が朝鮮について触れたものすべてである。まさに朝鮮は、文脈の中でごくわずか触れられるといった程度でしかなく、それをめぐる考察や情勢論議が展開されることはなかった。朝鮮の侵略に反対する態度が明確になったのは、平民社以前と比べての最大の前進だが、朝鮮について幸徳がどのように認識していたかをうかがわせる史料さえない。

ここで、幸徳の書簡についても検討しておく。

一九〇五年に獄中から堺にあてて書かれた書簡の中で、彼は出獄後の希望について述べている。その第四として「北海道或は朝鮮に田園を買ひ、数百人の農夫と理想的生活を為して、静かに天真を養ふ」ことがあげられていた。これについては飛鳥井雅道が検討済みなので詳しくは述べないが、幸徳はやはり朝鮮のすみずみに至るまで、現に朝鮮人が生活を営んでおり、その人々に対して日本人の普通の人々が侵略行為を行なっているということに気づかなか

ったのである。あるいは、平民であり社会主義者である自分には免罪されているという考えもあったかもしれない。

二年後、第三次日韓協約の頃、幸徳は百瀬晋にあてて「小にして谷中村あり、大にして朝鮮あり、法律と条約の論理は暴力」と記した(52)。また、一九一〇年に湯河原から新村忠雄と大石誠之助にあてた手紙は、サンフランシスコで製作された安重根の絵葉書について触れている(53)。

朝鮮を谷中村になぞらえるのは、田中正造の考え方と似ているが、幸徳は単に政府の強圧のアナロジーを述べたにすぎまい。これに対し田中正造は「朝鮮のほろびるハ対岸ニして見へる、己れの心の腐れたハ内ニして見へず。我國今や死したり。死灰ハ再び燃へず。国民更ニ新たニ自身薪木となりて再生するにしかず」とその書簡に記している(54)。大國主義や排外主義にとられた日本自身へのとらえ返しは、田中正造のほうにより深いものがあるにちがいない。

ともあれ、幸徳は平民社以前よりも以降のほうが朝鮮を論じていない。思想総体を見るならば、それなりの前進があったにもかかわらず、である。このことは何を意味するのだろうか。文章において取り上げないということは、それだけの価値ないし重要性を感じなかったということの表現ともいえる。推測の域を出ないが、日本の確保すべき勢力圏として朝鮮を考えなくなった平民社以降の幸徳は、逆

に朝鮮について論ずべき価値を見い出せなくなったのではなからうか。

幸徳は亜洲和親会などを通じて中国人とは一定の親交を結び、獄中においても張継の消息を尋ねているほどである(55)。また、孫文の文章をみずから手で翻訳して『平民新聞』にのせてもいる。幸徳の中国認識にも問題はあつたが、少なくとも彼が朝鮮に対して中国ほどの関心を持つたこととは事実であつた。

まとめ

一九一一年一月二四日、幸徳は一〇名の同志とともに刑場の露と消えた。彼が社会主義者として名実ともに活躍した期間は長く見積もっても一〇年におよばない。短いとはいえ、この期間に日本に社会主義を登場させ、ブルジョア的な価値観から自立した論陣をはり運動を展開したことは、幸徳の先駆的業績として充分評価されねばならない。

しかし、幸徳の朝鮮認識については以上で論じてきたように高く評価しえないものがある。本稿で扱った時期の幸徳の朝鮮認識を三段階にまとめてみると(一)アモイ出兵以前——軍事力の行使も含めて朝鮮を日本の勢力圏として確保しなければならぬとする時期(二)萬朝報社退社

まで——経済的な側面から朝鮮を日本の確たる勢力圏とし「併呑」までも展望する時期(三)平民社以降——朝鮮への日本の侵略政策を否定する時期、とならう。これは幸徳の思想総体の前進と照応している。

幸徳が朝鮮への侵略を否定する立場に到達したのは、社会主義の理念によるものであつた。もちろん、社会主義理論の面では充分なものではなかったろうが、日露戦争は資本家の利益にはなつても平民には悲惨をもたらしものではない、とする考え方は、朝鮮への侵略に対しても同様適用されたわけである。これがすなわち、ブルジョア的価値からの自立という初期社会主義の功績にはかならない。だが、こうしたレベルでの朝鮮認識には、いくつかの問題点が残されていた。

幸徳が平民社以降、朝鮮についてほとんど論じていないのでまとめにくいだが、大よそ二つのことを指摘しておきたい。

第一は、朝鮮に対する無知である。幸徳は日帝の侵略に對する朝鮮民族の抵抗の重要性を評価できず、また朝鮮について知らうとした形跡がない。幸徳は日露戦争終結以降、主として第二インターに属する欧米の社会主義に関心を傾けていた。一九〇五年の書簡で朝鮮を無人の田園のごとくイメージしていたことも、朝鮮について知らうとせず、

他者としての朝鮮民族の主体性を認識できなかったためであらう。

第二に、日本人が朝鮮への侵略者として位置していたことが把握しきれないということが指摘できる。日本の朝鮮侵略やそれと日本人大衆との関わりは、どこにも論じられず、それへの科学的認識を得ようという姿勢も見い出せない。

詳しく論じられていないことを批判するのは歴史学の方法からいって、あまり公平ではない。そのことは承知しつつも、幸徳が平民社以前に朝鮮について論じたことがどこにも総括されていないことを、見落とすわけにはいかないのである。こうした問題は、社会主義者に限らず日本人全体のものであったが、日本の変革をめざす立場でありつつ朝鮮の問題の重要性がその主張に反映されなかったことは指摘するに足るものではなからうか。

朝鮮問題を内実あるものとしていかにみずからの思想の中に位置づけていくかは、大正社会主義以降の課題となった。私の研究も引き続き一九一〇年代以降へと進められていくであらう。

- 13) 無署名「対清運動」(『萬朝報』一九〇〇年6月22日)『全集』第二卷355頁
- 14) 無署名「協同と外交」(『萬朝報』一九〇〇年6月30日)同前359～361頁
- 15) 無署名「連合軍の方針」(『萬朝報』一九〇〇年8月9日)同前395～396頁
- 16) 無署名「罪、白人同盟に在り」(『萬朝報』一九〇〇年9月23日)同前438～441頁
- 17) 無署名「日本の態度方針」(『萬朝報』一九〇〇年7月29日)同前377～378頁
- 18) 無署名「保全と分割」(『萬朝報』一九〇〇年8月16日)同前407頁
- 19) 前出「対清運動」、354～355頁
- 20) 無署名「朝鮮の動乱と日本」(『萬朝報』一九〇〇年8月23日)同前415頁
- 21) 無署名「日露の關係(朝鮮問題)」(『萬朝報』一九〇〇年8月3日)同前380～381頁
- 22) 前出「朝鮮の動乱と日本」、415頁
- 23) 秋水「断じて名譽に非ず」(『萬朝報』一九〇〇年9月27日)同前441～443頁
- 24) 秋水「排帝主義論」(『萬朝報』一九〇〇年11月17日)同前464～466頁
- 25) 井口前掲論文137頁
- 26) 無署名「厦門の動乱」(『萬朝報』一九〇〇年8月31日)『全集』第二卷424～425頁
- 27) 『全集』第二卷による。

史苑(第四六卷第一・二号)

- (1) 註 拙稿「日本の初期社会主義思想と朝鮮認識——その機関紙誌の再検討」『立教日本史論集』第3号(85・12)
- (2) 幸徳秋水「露国の要求」(『萬朝報』一九〇〇年3月10日)『幸徳秋水全集』第二卷(明治文献、以下『全集』と略記)37頁
- (3) 秋水「日本の外交」(『萬朝報』一九〇〇年3月12日)同前38頁

- (4) 秋水「感情的外交論」(『萬朝報』一九〇〇年8月16日)同前14頁
- (5) 幸徳秋水「在野の外交論」(『萬朝報』一九〇〇年4月16日)同前58～59頁
- (6) 幸徳秋水「日露議定書を読む」(『萬朝報』一九〇〇年5月14日)同前76～78頁
- (7) 幸徳秋水「如何にして今日の東洋に処すべき乎」(『萬朝報』一九〇〇年3月19日)同前46頁
- (8) 井口和起「幸徳秋水『廿世紀の怪物帝國主義』について」京都大学『人文学報』第27号(68・12)
- (9) 大原憲「幸徳秋水の思想と大逆事件」(一九七七年)83～84頁
- (10) 無署名「列国協同」(『萬朝報』一九〇〇年6月16日)『全集』第二卷352～353頁
- (11) 無署名「英露の關係」(『萬朝報』一九〇〇年8月14日)同前400～404頁
- (12) 井口前掲論文131頁は、一八九九年の「ベ卿の四国同盟論」について同様の指摘をしている。

- 28) 無署名「清国保全の意義」(『萬朝報』一九〇〇年9月15日)同前435～436頁
- 29) 井上清「日本帝國主義の形成」(一九〇八年)83頁は「厦門占領の失敗は、日本の支配者たちに大痛棒をくらわせた」と評している。
- 30) 前出「排帝主義論」、463～466頁
- 31) 無署名「文明を汚辱する者」(『萬朝報』一九〇〇年10月10日)同前450～451頁
- 32) 大原前掲書82～83頁
- 33) 幸徳伝次郎「社会主義の大勢」(『日本人』一九〇一年月8月20日)『全集』第三卷400～406頁
- 34) 無署名「天下の至愚」(『萬朝報』一九〇一年5月3日)同前234頁
- 35) 無署名「日本の責任」(『萬朝報』一九〇一年4月11日)同前223～224頁
- 36) 無署名「危険は内に在り」(『萬朝報』一九〇一年4月2日)同前218頁
- 37) 無署名「妨害と復讐」(『萬朝報』一九〇一年5月12日)同前239～240頁
- 38) 幸徳生「日本の東洋政策」(『萬朝報』一九〇三年5月17日)『全集』第四卷266～270頁
- 39) 幸徳伝次郎「非戦論」(『日本人』一九〇三年8月5日)同前424～428頁
- 40) 幸徳秋水「非開戦論」(『社会主義』一九〇三年7月3日)同前414～423頁
- 41) 無署名「抛棄乎併呑乎」(『萬朝報』一九〇三年8月28日)

朝鮮認識における幸徳秋水（石坂）

- 同前338～340頁
- (42) 『平民新聞』第32号の「敬愛なる朝鮮」を幸徳のものとする論者もあったが、その筆者は木下尚江と思われる。詳しくは谷口智彦「幸徳秋水は『敬愛なる朝鮮』を書かなかった」『朝鮮研究』第168号（77・7）。
- (43) 無署名「真に己む可らざる乎」『平民新聞』第11号1面（一九〇四年一月24日）
- (44) 無署名「戦争の結果」『平民新聞』第14号1面（一九〇四年二月14日）
- (45) 無署名「社会党の戦争観」『平民新聞』第41号1面（一九〇四年八月21日）
- (46) 幸徳秋水「文明の徳沢」『牟婁新報』64号（一九〇七年一月1日）、『全集』第六卷117～118頁
- (47) 幸徳秋水「道徳論」『社会新聞』第11号3面（一九〇七年八月11日）
- (48) 幸徳秋水「東京評論（第三信）」『大阪平民新聞』第9号1面（一九〇七年十月5日）
- (49) 「病間放語」『高知新聞』（一九〇八年一月1日）『全集』第六卷380～390頁
- (50) 秋水病夫「巢鴨だより」『直言』第22号6面（一九〇五年七月2日）
- (51) 飛鳥井雅道「明治社会主義者と朝鮮として中国」『三千里』第13号（78巻）
- (52) 百瀬晋あて書簡（一九〇七年七月）『全集』第九卷326頁
- (53) 新村忠雄あて書簡（一九一〇年五月24日）同前504頁、大石誠之助あて書簡（一九一〇年）同前510頁
- (54) 大出喜平ほかあて書簡（一九〇七年七月20日）『田中正造全集』第17卷（一九七九年）55頁
- (55) 石川三四郎あて書簡（一九一一年一月4日）『全集』第九卷555頁